

もつと食べたい

一年三組 131168 山本 裕介

唐突に叩かれた玄関の音で私は目を覚ました。時刻はすでに深夜一時を回り、連日の仕事の疲れもあってか私は早々と眠りについていて。そんな時間に叩き起こされたものだから私は顔に不快感を滲ませて玄関の扉を開けた。もつとも、それは誰が来たのか分かっていたせいもあっただろう。

案の定扉の前に立っていたのは私の友人の道沢であった。彼と私は大学からの付き合いで卒業して十年たった今でもよく顔を合わせることもある。道沢は口が悪く、おまけに金遣いが荒いものだから友人といった友人も私くらいしかおらず、両親からも勘当される始末。当然何か困ったことがあっても頼れるのは私くらいというわけだ。その私でさえこうして今彼の不作法さに頭を痛めているのだから、おそらく今もまともな友人はいないだろう。

扉の前の彼はいやにやつれており、目には隈が浮かび、腕は骨が浮かび上がるほどやせ細っていた、おそらくパチンコや競馬で金を掏ってロクに食べてないせいだろう、元々稼ぎが少ないせになぜそこまでギャンブルに嵌るのか、私には理解しかねる。そうして私が彼が話し出すのを待っていると、彼は口を開き「腹が減った。何か食わせてくれ」と言ってきたのだ。私の対応も慣れたもので彼を中に招き入れて何か食わせてやることにした。

食わせる、と言っても私自身料理はこれっぽちもできないので食事はだいたいの外食が惣菜で済ませている。当然彼に出せるのも冷凍庫に入っていた冷凍食品くらいだった。大した物は無いがいいのか？ 私がそう尋ねると「良いから早く出してくれ」と言ってきた。その時の彼はどこか落ち着きがなく、何かに怯えているようにも見えたが、その時の私は気にも留めなかった。

冷凍食品を温め、道沢の前に出してやると彼は何も言わずに出されたものを口に掻き込み始めた。よっぽど腹が減ってたんだと思うと同時に奇妙な違和感のようなものを感じた、がその時の私にはその違和感の正体を掴めなかった。

私がそんなことを思っていると彼はいつの間にか料理を平らげてしまっており、次のものはやくだせとせびって来るのだった。その後私はいくつか冷凍食品を出してやったが、彼はあつという間に平らげては早く次のを持って来いと口うるさくせがんでくるので、私も少々頭に来てしまい、ささやかな反抗のつもりで冷凍食品を解凍せずに彼の前に出してやった、私は十中八九彼が激怒するだろうと思ったが、僅かに反省もするのではないかという期待も込めていた。だが彼の反応は全く違っていた。

彼は冷凍されたままの食品をそのまま口に運び始めたのだ。先ほどまでと同じように、一心不乱に食品を口の中に掻き込んでいくではないか。私はその時初めて、道沢の様子が異常なことに気が付いたのだ。

私が以上を感じ、道沢を止めようとするが彼は私の静止を払いのけ、その後も次々に咀嚼を続けていく。

私は彼がついに薬物に手を出したのではないかと思い、どう彼を止めようか思索してみると、不意に奇妙な音が鳴ったのに気付いた。ボリボリという何か固いものをかみ砕くような音だ。それが道沢が座っている椅子の下あたりから鳴っているのに気付いた。わたしは恐る恐る彼の足もとと見てみた。そしてそのあまりの光景に言葉をなくしてしまった。

道沢の両足が無くなっているのだ。いや、正確には彼の両足が体の内側にめり込んでしまっているのではないか。だが奇妙なことに彼の足からは血の一滴すら流れてはいなかった。だがどうの道沢は両足がそんなことになっているというのに、全く気にせず無我夢中で料理を貪り食っていく。まるで彼の体が彼の意志とは無関係に動いているように。私といえばその光景をみた瞬間恐怖のあまり床に座り込んでしまい、そこから一歩も動けぬ状態であった。いや、あの時は動けずに幸運だったと言えるかもしれない、なにせ下手に動いていたら食われていたのは私だったかもしれないからだ。

動けぬ私を尻目に、道沢はなおも咀嚼を続けていく。そしてそれに伴い道沢の体もどんだん内側にめり込んでいき、やがて下半身は失われ、両腕だけでテーブルにしがみつき、手づかみで手あたり次第に料理を平らげていくではないか。

いったいなぜあのような状態で動けるのか、そもそも食べた物はどこへ行っているのか。考えれば異常な部分は多々あったがその時の私の思考を埋め尽くしていたのは恐怖以外に他ならない。目の前の事態について考える余裕も、友人を止めるはずも、私にはなかった。

やがて彼はテーブルにあるものをすべて平らげ、そのころにはもはや道沢は口をのぞくすべての部分が消失していた。

そしてその口は道沢ではない深淵の底から響くような声でこう口にしたのだ。

「もつと食べたい」

そしてその口は裂けんばかりに開き私めがけてとびかかってくるのだ、私はその時自分もテーブルに散らばっている食品の食べかすのように見るも無残に食い散らかされてしまうのだと悟った。私は避けることもせず、ただ茫然と地面にすわりこんでいるだけだった。

だがその口は私の目の前まで飛んできたかと思うと、突如煙のように掻き消えてしまったのだ。その口はもうどこにも見当たらず、後には道沢が食べ散らかした食品の残りかすと、私がいるだけだった。

翌日、私は居間で気絶しているところを隣人に見つかった。回覧板を渡そうと家を訪ねたが応答がなく、不自然にも鍵が開いていたので気になって入ってきたという。私はその場を適当にはぐらかし隣人は去って行った。数日後、道沢が行方不明になり警察が捜査しているという話を聞いた。当然、彼と交友関係にあった私にも警察が話を聞きに来た。だが私はあの夜のことは一切話さず、道沢とはしばらく会っていないと説明し、警察もそれに納得して帰っていった。

たとえあのおぞましい出来事を話したとしていったい誰が信じてくれるというのか。狂人か、あるいは殺人者扱いされ、警察に尋問されるのがオチだ。

私はあの日のことを心の奥底にしまい、二度と思い出すまいと誓った。そうして気が付いたのだが、私は道沢をそれほど大切な友人とは思っていなかったようだ。あれから彼のために悲しむことも、涙を流すことも無く、ただいつものように日々を過ごすだけだった。私にとって彼とはその程度の存在だったということだ。

そうして私はあんなことがあった今も、普段の変わらない日常を過ごしている、あれからあの口が私の前に現れることもなく、時折脳裏をよぎることはあっても、普段の私はあのことを忘れていた。

しかし私はあれ以来食欲が旺盛になったような気がする、以前なら食べきれなかった量もの食事でも今なら簡単に平らげることができる。しかもそれだけ食べなくても、満腹感はなく、またいくら食べても体重が増えることもなかった。

ある日会社の同僚と話していると、彼はこないだ私が仮眠室で休息をとっていると、このような寝言を呟いていたという。

「もつと食べたい」と